

様子がよく現われている。

4. まとめ

以上、鹿児島で観測された2重圏界面は、そのほとんどが亜熱帯前線と熱帯圏界面であること、この亜熱帯前線の出現頻度は年間を通じてかなり多く、寒候期に増加する。この前線の状態曲線の形は、サブジェクトとの関

係位置、地理上の位置などと関係が認められ、また、転移層のはっきりした亜熱帯前線の転移層内では、下降気流が卓越しており、その立体構造は、前線下面に沿った下降を示している。などのことが判明した。

最後に、この調査に当たり、種々ご指導や助言をしていただいた。比嘉台長と毛利前台長にお礼申し上げます。

第1回夏季大学「新しい気象学」教室の経過

学会の啓蒙活動の一つとして開かれた第1回の夏期大学「新しい気象学教室」は7月21日から27日まで気象庁講堂で開かれた。参加者90名、最終回まで出席者は変わらず盛況であった。第1回目としては成功であったと言ってもよいであろう。出席者のおよそ80%は学校教師（主として高校）であった。この講習会を機会に学会に入学された人は17人（約20%）に達し、学会の発展のためにも有意義であったと思う。この講習内容は講習会プリントとして出席者にはあらかじめ配布したが出席出来なかった人からの申込みも多く、現在（8月10日）400部ほど配布した。

このような啓蒙活動は、労力さえおしまなければ、今後の学会活動においても是非つづけてゆきたいことと思われるので、回収された出席者からのアンケートに示された意見等をふくめて、参考になる点をまとめておきたい。

1. アンケートにあらわれた主な愛見

アンケートは5日と6日めに次の形で行なわれた。

①講習会の時期としていつ頃を望むか、②希望する課目、程度、講師名等、講習の内容についての御意見、③その他の意見。29人（約34%）の高い回収率で回答が得られたがこれをまとめると次のようである。

①については7月下旬～8月下旬がよいという意見が圧倒的に多く、夏の講堂は暑いから春か秋もしくは冬の休みに開いてほしいという意見が2～3あった。

②については意見はまちまちだが地学教育が普及してきたためか、今回のものより程度をあげてほしいという意見がかなりあった。これは今後の計画で考慮すべきことであろう。また総花的でなく、例えば気象レーダーといったテーマに項目をしぼって2～3日講習をしてほしいという意見もみられた。新しく希望される項目としたは、a 気象観測技術の習得できるような講習会、b 極地の気象、c 自然改造計画と気象、d 惑星の気象、e 最近の参考書、論文の紹介、f 動気候学、g 産業気象学、h 台風、i 雷、j オゾン、k 気象物理、l 小気候、m 農

業気象、n 気象災害、o 梅雨、p 天気図実習等であった。その他の③の意見としては、冷房のない講堂が大へん暑かったから、もっと涼しい環境でゆっくり講習がうけたいという意見が多かった。

2. 講習会世話人の二、三の感想

a. 出席者が最後までへらなかつたこと、講習後の質問の多かつたことは、参加者が非常に熱心な方ばかりであったことを物語るものであろう。

b. 2日目に行なわれた気象庁見学は気象庁測器課のお世話で大へん親切に行なわれたが、13時すぎまでかかる熱心な見学であった。また特に希望者には7月29日にレーダーだけの特別見学を行なった。机上の講義だけでなく講習の中に見学とか実習を加えることは今後の計画においても是非考慮すべきことであろう。

c. 学会出版物を入口において、これを販売したが、出席者が希望するものは集誌や天気ではなくて、ある問題について解説、特集されている気研ノートであった。出席者が学校の教師であるということもあるかもしれないが、学会は今後はかなり程度の高い啓蒙的解説書を出す必要はないだろうか。たとえば台風や梅雨について、新しい研究をもちこんだ解説書が是非ほしいという要望が再三いわれたが、気研ノートで、最近このような特集をしていないので要望に応じられず、大へんこまった。

d. アンケートにもみられるように啓蒙される対象は決して低くない。今回は出席者が高校教師が多かつたこともあったかもしれないが地学教育がかなり浸透してきているから、安易な気持で啓蒙活動をつづけるならば、魅力を失い出席者は減少してしまうであろう。

最後に今回の講習会について後援者となつていただいた東京都教育委員会、東京都理科教育研究会、日本地学教育学会、テキストの出版等につき色々協力をお願いした森重出版株式会社、気象庁見学につき御骨折をいただいた気象庁測器課の各位に対し厚く御礼申し上げます。

（根本順吉）